ラテンアメリカ都市物語

＝第9回＝

サントドミンゴ 新テクノロジーで 変貌しつつある 新大陸最古の植民都市

鈴木　渉

はじめに

ドミニカ共和国の首都であるサントドミンゴは、クリフトファー・コロンブスが第二回目の航海後に建設した「新大陸」最古の「植民市」である。よって、「新大陸」最初の教会や病院、砦、大学が建てられたほか、コロンブスの息子で、第4代ヌエバ・エスパーニャ副王となったディエゴ・コロンが建てたアルカサルと言われる邸宅も残っている。その後、スペイン人のメキシコ・南米侵略によりサントドミンゴ植民市は廃れるも、ハイチによる占領を経て実現した1844年のドミニカ共和国独立において中心的な役割を果たした。20世紀に入り、米国による占領や独裁者トルヒージョの統治を経て、サントドミンゴ市はカリブ海最大の都市に成長し、同国の民主化の進展や近年の急速な経済発展においても大きな存在感を内外に示している。

本稿では、サントドミンゴの歴史や政治、経済発展などの詳細に渡る記述は『ドミニカ共和国を知るための60章』（明石書店 2013年）や『ハイチとドミニカ共和国 - ひとつの島に共存するカリブ二国の発展と今』（アジア経済研究所　2018年）などの書籍や文献等に譲り、2018年の“今”、サントドミンゴで何が起きているのか、市民の暮らしぶりや筆者が実際に街を歩いて感じたことを中心に記述してみたい。

市民意識の変化：モノから価値へ

他のラテンアメリカ諸国同様、ドミニカ共和国も貧富の差が激しい。富裕層は庶民の生活圏とは別世界の邸宅やマンションに住み、使用人やベビーシッターに家事を「外注」するのが普通である。彼らは大型車を運転し、パーティーでは豪華な食事を楽しみ、週末は別荘や会員制のクラブで家族や富裕層の友人たちと過ごす。その一方で近年、彼らの一部に「環境への配慮」や「健康」、「持続性」などを考慮した動きが見られるのが興味深い。

最近のサントドミンゴは至るところで現在最新鋭のジムが雨後のタケノコのように増えている。日本や米国でもよく見かける会員制のジムで、ヨガ、ピラティス、マインドフルネスや、パーソナルトレーニングなどのメニューがあるところも多い。筆者の弁護士の友人は、毎朝5時半に起床して会員制のジムに出向き、1時間半ほど運動をした後に出勤するそうである。まさに「朝活」である。また、一部の富裕層を中心に健康な食生活への意識が高まり、スーパーの中に「健康食品コーナー」が設置されているほか、オーガニック食品、ベジタリアンやビーガン（完全菜食主義）向けの食品を販売する店も現れている。元来ドミニカ人は揚げ物など多量の油を使う料理を好み、毎日の食卓に欠かせないトストン（調理用バナナの揚げ物）やギサード（肉の煮込み料理）、アビチュエラ（インゲン豆の煮物）やサンコーチョ（肉・野菜入りスープ）などの料理は高カロリーかつ高タンパクで、同国出身野球選手の力の源泉でもある。これら伝統的な食生活をある意味否定する形の「健康食品」の広がりは、近年の経済成長により、市民の一部に食に気を使う余裕がある層が出て来た証左であろう。さらに近年はランニングやサイクリングをはじめ、トライアスロンなどのスポーツに参加する層も出て来ている。首都を含む国内各地でこれ

らスポーツの大会が行われ、企業や政府も主催や後援を行っている。これは7～8年前には考えられなかった話である。

自動車についても、富裕層はガソリンを大量消費する車高の高い大型のジープを好む傾向があったが、近年小型車を所有する富裕層も出て来た。市内渋滞時の移動を考慮し、小型車を運転する傾向になって来ている一方、環境に配慮する考えも出てきている。

ドミニカン“青汁”をカフェ・サントドミンゴとともに頂く
（写真はすべて筆者撮影）

ジムの入口

テクノロジーとシェアリング・エコノミー

ITU（国際電気電信連合）によると、2016年のドミニカ共和国における携帯電話の契約数は870万台を超える。これは総人口比で8割を超える数字で、先進国並みの水準と言って良い。日本同様、国民の多くはスマートフォンを有し、この強力なインフラを基盤としたサービスをサントドミンゴでも使える。例えば、米国発祥のライドシェア・サービスであるUBER（ウーバー）は首都圏周辺県をカバーしており、アプリを使えば市内はどこでも簡単に移動できる。筆者も今回（2018年5月）のサントドミンゴ市内移動はすべてUBERを利用した。アプリを起動し注文ボタンを押すと、渋滞時以外は数分以内に車がやって来る。価格は通常のタクシーの半分程で、事前の値段交渉は不要、料金は事前に登録したクレジットカードから自動的に引き落とされるので、「ぼったくり」の心配もない。一番驚いたのは、運転手の旺盛なサービス精神だ。UBERはユーザーからのフィードバックにより、ドライバーの評価が決まる。プライドが高く、低評価を付けられるのを嫌うドミニカ人運転手にとって、ユーザーから高評価を得ることは非常に重要である。今回UBERのドライバー達からは、クーラーの効き具合を聞かれたり、アメ玉を貰ったり、さらには到着時間を短縮すべく最短のルートを選択して貰ったり、通常のタクシー運転手では考えられないレベルの「おもてなし」サービスを受けた。なお、UBERは国民の勤労意欲やサービスレベルの向上に好影響を与えたほか、雇用も生み出している。近年の著しい経済発展にもかかわらず、国民の約5割が統計に残らない「非公式経済」下の社会保障も受けられない仕事に就く状況の中、自家用

UBERで配車する様子

車を所有している中間層が本業の余剰時間や失業中の時間を使って生活費を稼げる環境にあることは、社会包摂、失業対策、治安改善の観点からも非常に有意義であると言えよう。

また、日本では「民泊」仲介業者の象徴として取り上げられる、住宅スペースのシェアリング・プラットフォーマーであるAirbnb（エア・ビー・アンド・ビー）もドミニカ共和国内では広く普及している。中央銀行の最新データ（2017年）によると、現在同国を訪問する純外国人観光客数は約540万人で、総人口のほぼ半数を占める。彼らの多くは東部プンタカーナを中心としたオールインクルーシブ・ビーチリゾートでの滞在を楽しむが、2013年に東部海岸地帯と首都サントドミンゴ間の直通高速道路が開通してからは、両地帯の移動が2時間半ほどに短縮され、ビーチリゾートから首都へ流れる観光客数も急速に伸びている。彼らは主にスペイン植民地時代の面影が残る旧市街（ソナコロニアル）を訪問するが、観光客の急増に宿泊施設の供給が追いついていない。そこで近年、富裕層や外国人によるAirbnb貸出用のマンションやコンドミニアム、一軒家の購入が急増している。UBER同様、Airbnbもユーザーからの評価が物件の貸出に直接影響を与えるため、オーナー達は非常に気を使ってサービスを提供している。部屋の装飾やベッドの質・美しさ、シャワーのお湯加減やクーラーの効き具合、掃除の速さなど、ドミニカ共和国の標準レベルからは、過剰とも言える「おもてなし」サービスが展開されている。実はこれらサービスを支えるのも、普段は富裕層の家政婦や使用人として働く貧困層の人たちである。彼らは余剰時間を上手く使いAirbnb用マンションの管理業務に従事し、追加収入を得て日々の生活の足しにしている。（なお、旧市街にあるマンションをAirbnbで貸出しているサントドミンゴ工科大学に勤める筆者の友人は、掃除は使用人に任せつつ、ベッドメーキングと部屋の最終チェックだけは、昼休み時間に当該マンションに出掛けて自ら行うとのこと）。

筆者友人がAirbnbで貸出すサントドミンゴ旧市街のマンション

首都サントドミンゴにおけるシェアリング・エコノミーの普及はテクノロジーの急速な発展とその拡大の結果である。そして前述の携帯電話契約数の増加は、安価なスマートフォンの流通とデータ通信コストの急激な低下によるものである。現在ドミニカ共和国の携帯電話市場ではClaro、Altice（仏Orangeから携帯電話事業を買収）、Vivaの外資及び民族系通信会社が激しいシェア争いを繰り広げている。筆者が同国外務省の友人から教えて貰ったViva社の通信パッケージは、何と7日間の「パケ放題」で145ドミニカペソ（約320円）であった。半信半疑の中、市内スーパーマーケット内にあったショップで申し込んだところ、消費税（18%）を追加した170ペソ（約380円）程で本当に契約できた。その後サントドミンゴ市内で、UBERやWhatsAppなどのスマホ向けアプリの利用に大きく寄与したのは言うまでも無い。

キャッシュレス社会

今回ドミニカ共和国を訪問して驚いたのは、ほぼすべての観光地もしくは外国人が立ち寄る殆どの場所でカード決済が可能だったことである。ちなみに日本における「キャッシュレス決済」の比率は約2割で、日本政府は2027年までに同比率を4割に引き上げるとの目標を「未来投資戦略2018」で掲げているが、インバウンド観光客が急増する中で地方に限らず都内でもカード決済「お断り」の場所はまだ多い。今回、終末のブランチを楽しみにサントドミンゴ市内にある「オーガニック系」のカフェを週末のブランチを楽しみに現地友人と利用した際も、クレジットカードで支払いを済ませた。現在ドミニカ共和国では、Visa、AMEX、Mastercardなどの主要カードに加え、PayPalや、モバイル用決済手段であるtPagoが利用できる。「tPago」は、2010年にドミニカ共和国でサービスが開始され、他のラテンアメリカ諸国にも広がるモバイル決済のプラットフォームである。各アカウントは銀行口座に直結しており、スマホ上のアプリから、レストランや買物などの支

払いに加え、オンライン・ショッピング、公共料金、税金、大学の学費の支払い、さらにはtPagoユーザー間の送金（P2P送金）も出来る非常に便利な決済プラットフォームとして、急速に普及している。

実のところ、サントドミンゴ市民を含む同国国民の多くが「非公式経済」の下、“その日暮らし”をしているが、その現状においても「キャッシュレス経済」が浸透している。2005年にドミニカ共和国政府は、他のラテンアメリカ諸国に先駆け、貧困層に対する生活保護費の支給をVisa社の決済技術を活用したプリペイドカード“Tarjeta de Solidaridad”（連帯カード）の配布により行った。これは、生活保護費を電子的に支給することで、その用途を生活用食品・雑貨類の購入、公共料金や教育費用の支払いのみに限定し、目的外利用を防いでいる。実際にカードの給付を受けた者は、コルマド（Colmado）と言われる食料品店に出向き、日々の生活に要する物品購入や支払いをカードにて行う。プリペイドカードは現金と比較すると、盗難や紛失のリスクが小さく、各カードに電子的に入金された給付金は他人に渡せないので、セキュリティがある程度担保されている。また、カード受取時にはセドゥラ（Cédula）という身分証明書（選挙の投票や法人の設立、パスポートの取得や銀行口座の開設、携帯電話契約の際などに提示する、本人の顔写真、署名、個人判別のQR・バーコード入りの身分証明書）の提示が必ず求められるので、「不正受領」がある程度防げるというメリットもある。さらに政府は、カード利用状況のデータを確認・収集できるため、受給者レベルで生活保護費の利用状況を把握することも可能である。このように社会のあらゆる層で「キャッシュレス」決済が広がり、市民・国民の生活の一部となっている。

市内カフェのレジに並ぶカードリーダー

おわりに

カリブ海地域で唯一地下鉄を有するサントドミンゴ市の地下鉄網延長の現況、貧困地区から市内をつなぐ新たな交通手段として期待されるロープウェイの稼働状況、新たに開場した複数の商業施設や、外資系高級ホテルのサントドミンゴ進出についても紹介したかったが、紙面の関係上省略させて頂きたい。

サントドミンゴ市に限らず、他のラテンアメリカ諸国や「開発途上国」、「新興国」と言われる国々の首都・大都市は、少なくとも表面上は先進国と遜色ない形で最新テクノロジーやトレンドを導入し、それらが市民生活に大きな影響と変化を与えている。今後サントドミンゴ市がどの様に変化・発展してゆくのか、注意深くフォローしてゆきたい。

経済発展が著しいサントドミンゴ新市街

（すずき わたる　一般社団法人日本・ドミニカ共和国友好親善協会代表理事、GR Japan株式会社公共政策マネージャー）

『マヤ探検記　ー人類史を書きかえた偉大なる冒険　上・下』

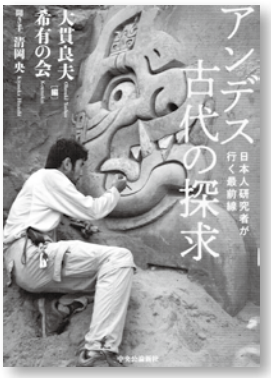
ウィリアム・カールセン　森 夏樹訳　青土社　2018 年 5 月
上・下各 398 頁　各 2,800 円＋税　上 ISBN978-4-7917-7060-1・下 978-4-7917-7061-8

1839 年ニューヨークから南米に向かう船に、40 歳の画家で建築家のフレデリック・キャザウッドとともに乗り込んだ 34 歳の弁護士のジョン・ロイド・スティーブンスはグアテマラ・シティを目指す。米国政府国務長官から中米連邦共和国と通商協定を締結せよとの指令を受けての旅だったが、同時に二人は中米の密林の中に複雑な彫刻が施された石が埋もれているとの曖昧な報告を読んで、公務の後に密林に入って古い遺跡を訪れたいという計画をもっていた。当時この地域一帯は政治的抗争もあって治安が悪化し、さらに悪天候、蚊の襲来、マラリアに苦しめられ危険で困難な旅であったが、グアテマラに入り次々に密林の中のマヤの遺跡、石像、石碑を見つけ、調査し記録を取り、まだ写真機のなかった時代に、キャザウッドは撮影対象をプリズムで紙に反射させて輪郭をなぞるという光学装置を使って精密な絵を数多く描いた。

まだ考古学という概念が生まれる前で、欧米の探検家や博物学者はマヤの遺跡がそこに住む先住民の先祖が造ったものとは思ってもいなかった時代に、二人はコパン、キリグア、パレンケ、ティカル、ウシュマエル、チチェン・イッツァ、トゥルム等で高度な文明の痕跡を訪ね、計測し、綿密なスケッチで石柱に彫られたマヤ文字を正確に写し取った貴重な記録を残した。

米国の勃興期のカリフォルニアでのゴールドラッシュ、東部から西部を目指す人々を運ぶためのパナマ横断鉄道建設の前夜を背景に、それらにも関わることになった二人の探究心、遺跡の正確な姿を再現して伝えようとした真摯な姿勢は、米国のメソアメリカ考古学の始祖といってよい。上巻巻頭のキャザウッドが描いたカラー図版 20 点は遺跡の細部まで表しており、後世の写真にも優る素晴らしい資料である。

著者は、米国のジャーナリスト、作家。グアテマラに長年逗留して二人の足跡を取材した臨場感あるドキュメンタリー。　〔桜井 敏浩〕



『アンデス古代の探究 ー日本人研究者が行く最前線』

大貫 良夫・稀有（けう）の会編　中央公論新社
2018 年 5 月　196 頁　1,800 円＋税　ISBN978-4-12-005082-4

東京大学が「新旧両大陸文明起源の比較研究」のため 1958 年からアンデス古代文明の調査を始めて今年で 60 周年。ペルーアマゾン上流のコトシュ遺跡を 1960 ～ 66 年に発掘調査し、先土器時代の紀元前 2000 年頃に建てられた「交差した手の神殿」と呼ばれるようになった大規模公共建築があったこと、コトシュ神殿が 3 回にわたって埋めた上に次の神殿が造られていたことを解明し、これに続くラ・パンパ、ワカロマそしてクントゥール・ワシへと続く調査発掘はこの神殿更新説を実証するものとなり、紀元前 3000 ～ 50 年頃のアンデス文明形成期を中心にした日本のアンデス考古学は多大な実績を挙げている。今世紀に入っても 2005 年から始まった北部山岳地帯のパコパンパ遺跡発掘は「平等だった社会にどのように権力が生まれたか？」権力生成のプロセス解明に努め、海岸地帯でもワカ・パルティーダ遺跡では巨大なレリーフを掘り当てたことは神殿更新の中で行われた儀礼と当時の宗教観の変貌を知る上で画期的な発見だった。ペルー中央高地南部のカンパナユック・ルミはチャビン・デ・ワンタルなど形成期の中心的大神殿から 600km も離れた遺跡だが、文化は周縁に行くほど洗練度が薄れ小規模になるというイメージを覆すものだった。他方、南部海岸地帯のナスカ高原に展開する大きな地上絵研究でも、東大のクントゥール・ワシ調査団出身の研究者が次々と新たな発見と解明を進めている。

本書は考古学書ではなく、アンデス文明研究の第一線で関わってきた 8 人の研究者との対話（聞き手は読売新聞文化部の清岡 央記者）を通じて、発掘の意図、経過、成果のみならず、地元住民との交流、遺跡保護とかれらの生活の相克、地元住民の誇りとなったクントゥール・ワシ博物館の建設例など、現代社会との関わりにも触れている。　〔桜井 敏浩〕